



心

家

慶次郎

岳

郎

御呼捨了願いませ

朝の八時に十五分ほど足りない時間に、最寄りの駅から東武東上線に乗った。

池袋に向かう方の客車には期待もできないが、三駅だけ下って終わるこちらの客車のシートはたくさん空いている。

駅に歩くのに、板橋区側の者は坂を上って来る。そこそこ容赦のない角度を持った、そこそこ長い道のりだ。

慶次郎は坂を上った分だけの疲れだけでもシートが吸い取ってくれるのではないかと、そんなことを頭の片隅に過ぎらせながら、それぞれ違う学校の制服を着た高校生の男の子の間に腰を下ろした。

華奢な体つきをした性格の優しそうな、ブレザーの制服にきちんとネクタイをした男の子の一つのバッグから、運動部の着替えでも入っているのか、少し饅えた汗の臭いが溢れていた。

詰襟のカラーはもちろん、ボタンを上から三つぐらい外している角刈りの体格の良い男の子は、紀伊国屋のブックカバーを付けた文庫本を読んでいる。楽しい場面を読んでいるのか、恋の話か、太い眉毛の間が柔和だ。彼の頭の上の窓が開いていて、短い角刈りの髪を通った風がエメロンの匂いをはらんでいる。

安堵感のある平和な香り、そんなエメロンの匂いに、朝の清涼な穏やかさを感じながら、慶次郎も小さなメッセンジャー・バッグから文庫本を取り出し、ドッグイヤーしてあるページを開いた。

スペンサーが恋人のスーザンを救うため、相棒のホークとハリウッドでポン引きを殺す場面だった。

三つ目の駅で下ろされた客の大半は、ホームの反対側に池袋からやってくる、そこから更に先に下る快速急行列車に乗るために並ぶことになる。

この駅から乗る人、一本前の短い各駅停車で慶次郎と同じように下ろされた人、そんな人たちが既にたくさん並んでいる。

数に病的に弱い慶次郎にも、池袋からやってくる急行列車が万が一空であっても、いまホームに並んでいる人の全てが座れることがないであろうことは分かった。

都心にあった私立の高校や大学が、その時価総額で数倍の広さを得られる郊外に転出したのであろう。事実、慶次郎自身が三十年ほど前に通っていた付属高校も、今はこの路線のどこかにある。

当時、デーゲームの時には屋上に上がって双眼鏡でのぞけば、後樂園球場の試合がなんとなく分かった。今は川原の草野球でも眺めているのだろうか。

尤も、いまは後樂園球場も東京ドームに生まれ変わってしまって、チケットを買わなければの

ぞけもしないのだが・・・。

年に何度か同じような時刻に、この路線に乗る。

座れないことは予想はついていたが、病的に楽観的な慶次郎は「もしかしたら」と考えてないところがなかった訳ではない。totoBIGでキャリーオーバーが五十億、六十億円と貯まっていくと「世間の人々は皆、俺のために貯金してくれているんだ」と半ば本気で考える慶次郎である。電車の座席の一つが慶次郎の為に空いていない訳はないと考えるのは容易いことだ。

反面、病的に臆病である慶次郎は、痛み止めのアスピリンも用意していた。一時間も・・・、否三十分も揺れる列車で立っていれば、腰の悪い慶次郎は辛いことになる。

初めてこの経路で墓参に行ったときは、朝の下り電車を舐めていた。舐めていたばかりに腰の痛みに冷たい汗を流し、キオスクもないような駅で飛び降りる羽目になってしまった。

病的に数字に弱くても、楽観的でも、臆病であっても、決してバカではない。少なくとも慶次郎自身はそう思っている。

アスピリンの錠剤を口中にためた唾液で飲み込むと、慶次郎は最も短そうな列の最後尾についた。饅えた汗臭さが漂っていた。文庫を開くとスペンサーとホークがポン引きから奪った金を持って、奪った車で逃げていた。

突然、ドラムとギターから始まる一聴しただけではなんの歌詞をがなっているのか判然ともしない音楽らしきものが大音量で鳴り響いた。華奢な体つきをした性格の優しそうな、ブレザーの制服にきちんとネクタイをした男の子が、パンツのポケットから携帯電話を取り出して、更に数小節分、その場の者たちに聴かせるようにしてから着信のボタンを押した。

着信の大音量に負けるのが悔しいのか大きな声で、着信の歌詞同様に訳の分からぬ日本語らしきものを話している。

慶次郎は読んでいたページに指を挟んで、隣の列に並び直した。

自分より若い人間だ、一つ二つは我慢なんて言葉を使うまでもなく、気にしないではいることができる。臭くて、世間知らずな男の子なんてものは、この東京ですら吐いて捨てる程いるだろう。そんな風なことを慶次郎は思った。

臭くて、世間知らずで、無知で、遠慮がなくて、道徳心のない人間なんて、赤ん坊しか許すことが出来ない。そんな風なことを慶次郎は思った。あるいは精神生活を離脱してしまったお年寄りも許せるかも知れない。どちらにしても、随分とケツの穴の小さな男だなあと、慶次郎は唇の左端が三ミリぐらい動く分だけ自嘲したりするのであった。

慶次郎は三十年前に埼玉の浦和から文京区後楽にある高校に通うのに、当時の国鉄で最も混む路線の一つと当時の私鉄（国鉄以外）で最も混む路線の一つを利用していた。赤羽線と丸の内線である。

この日の快速急行は慶次郎に当時を思い起こさせるのに充分であった。

四月の第二週の月曜日である。高校も大学や専門学校なども新学期が始まったばかりで、さすがにまだ脱落した者もないであろうから、買われたばかりの定期券の持ち主はほぼ全員が乗っているであろう。

隣の列に並び直した慶次郎は詰めたてのビール瓶がコンベアで流されて行くように、二分遅れで到着した快速急行に呑み込まれた。二分分のビール瓶がまた、この混みようを増してもいたのだろう。

それでも一つ目の駅に着いた時に吐き出された人数で、座席の前に立ち、吊革を握り、文庫を開くことができるようになった。

右隣に立つ黒い学生服がやはり文庫を開いているのが周辺視野に見える。

エメロンが香った。

慶次郎はそのエメロンの香りを見るように、自然と右を向いた。エメロンの香りを見られるはずもなく、その代わりに詰襟の男の子の手にしている文庫の、ページ上段に横書きされた「第二阿房列車」の文字が目に入った。

スペンサーとホークは盗んだ金で食事をしていたが、慶次郎は百閒先生とヒマラヤ山系君の会話を思い出そうとしていた。

慶次郎がスペンサーに集中できないまま、いくつもの駅を通過し、いくつかの駅に停車した。

停まる度に吐き出されていく人たちで、列車内は外の景色をなんとなく眺めても良いと思われる程度にのんびりとした空気になってきた。大雑把に言って、日本海の方に向かって走る列車の窓外は、当然都心より季節が遅く、いま昨日、咲き出したようなさくらもあったりする。

「ごめんなさい」

隣に立つエメロンの詰襟の男の子が慶次郎に謝った。

停まる電車の不規則なブレーキに蹠踉めいて、慶次郎の腰に腰を当ててしまったのだ。

アスピリンを服んだとはいえ突然の衝撃に腰の悪い慶次郎は顔を顰めたのかも知れない。

「いや、大丈夫。気にしないで」

それでも済まなそうな顔で、エメロンの男の子は開いた扉から降りていった。

小さな駅の狭いプラットフォームに、詰襟の男の子が大勢改札に向かっていく。男子校なのであろう。

彼らの向かう改札の方に、動き出した電車がゆっくりと追い越していく。

改札に向かう詰襟の流れの中、一人が立ち止まって慶次郎に頭を下げた。

慶次郎は閉じた文庫を一度だけ軽く振ってみせた。

エメロンの残り香が、小さく揺らいた。

・・・ような気がした。

## エメロン

<http://p.booklog.jp/book/55616>

著者：宗岳

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/w244/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55616>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55616>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ